

華嚴經の善財童子

(求道の旅)

松 永 大 覺

一

華嚴經に於ける若き求道者善財童子の道を求めるに就いて如何に困難なことであり、又如何に険しい道であるに拘らずそれを真しな態度で克服してゆく偉大な精神を論究するに当り先ず初めに華嚴經の概要を述べて置かうと思ふ。

華嚴經とは如何なる經典であろうかと云えばそれを簡単に現すものは経題である。華嚴經の經典は釈尊が始めて正覺を成就されて第二七日目に菩提樹下に於て説かれたものであつて、その思想内容は即ち仏陀の自所証の有りのままの真理の實況を説かれたものであるから他の經典に勝れた根本法輪である所以である。華嚴經の思想とは一言にして云えば万有の真理のことであつて、即ち宇宙の本体実性が華嚴と云うものである。故にこの真理は誰が発明したものでもなく、亦何人が説き始めたものでもないのである。所謂法爾常恒であつて横には十万に遍し、豎には三世を窮めて無限無際無始無終である、實に高尚深遠であつて仏果自証の極致である。

華嚴經は詳しくは大方広仏華嚴經と云うのであつて、大は包含の義で絶体円満の意味である。方は方正軌範の義であつて、邪曲を離れたること、広は普遍廣大、際限のなきことである。即ち大方広とは宇宙の大真理のことであり、仏とはその真理を覚れる聖者のことである。而るに我々は仏と云えば直ちに釈迦を想念するであらうが、その釈迦は一般に二十九才に出家修業して三十五才にして成道し、八十才にして入滅せる偉大な人間として知られているが、而しこの經典に現はさんとする仏は人間的生活をした釈迦ではなくて、釈迦をして永遠に仏教徒の歸依所とならしめしその自証の法身、即ち大方広仏である。大方広仏は永遠常恒の仏、普辺廣大の仏と云うことであるが、而し仏は常恒普辺であると云うだけでは未だ仏と云うものゝ持つ意味内容が明らかでない。そこでその意味内容を明らかにするものは華嚴の二字である。華嚴とは雜華の裝飾との意味であつて、大方広の真理を覚れる仏陀の正覚の美はしさを喻えた語である。古来から因の万行の華を以て果の万徳を嚴ると解釈せられてゐる。因の万行とは大菩薩道であつて自他の一切を救済せんとする大願を以て進む道である。その大志願の為に種々の行業を修習するが故に万行の華と云うのである。その大菩薩道は大方広仏を憶念して成立するものであるから、その万行によつて成就する果の万徳は、そのまゝ大方広仏を莊嚴するものである。即ち宇宙の真理を体得せる仏陀の正覚を表現し、それに合致することを説く經典と云う意味である。

この經典は漢訳にされて二部有り一は六十卷（東晋の仏陀跋陀羅の訳）二は八十卷（唐の实叉難陀の訳）であつて三十四品より成る。この第三十四品目が入法界品であつて、求道者善財童子の求道を明かしてゐるのである。又入法界品が祇園精舎を道場とする所から出發してゐることに注意しなければならない。祇園精舎は云うまでも

なく伝統的な教団の中心であつて釈尊の上足の弟子舍利弗、目連等の常住する所である。

一一

文珠師利¹⁾は祇園精舎を出て南方に遊行して覺城の東、婆羅林の中の大塔廟の処に至る。此、は過去の諸仏が遊行せられし処であつて、又過去の諸仏が菩薩であつた時苦行を修められた所である。こゝに於て文珠師利は熱烈な求道者善財童子に遇うのである。善財童子とは出生する時種々の珍宝自然に涌出したので当時婆羅門²⁾の中の善く相を明す師は善財と名づけたのである。即ち華嚴經卷第四十五の入法界品第三十四の二に文珠師利が善財童子を観察して、

「何の因縁を以てか名づけて善財と曰ふやと、此童子は初め受胎の時、其の宅内に於て七大宝蔵有り、其の蔵より普く七宝の樓閣を出し、自然に金銀、瑠璃、真珠、磲磈、碼碯を周備せり、此七宝より七種の牙を生ぜり、時に此童子は胎に有ること十月にして出生し、端正の肢体具足せり……、此事を以ての故に、婆羅門の中の善く相を明す師は、字けて善財と曰へり、此童子は已曾過去の諸仏を供養し、深く善根を種え、常に清浄を樂ひ、善知識に近づき、身口意浄くして、菩薩の道を求め、諸仏の法を修し、心の浄きこと空の如くして、菩薩の行を具へたり」と、

善財童子は文珠師利を見るや偈（華嚴經卷第四十五の入法界卷第三十四の二の終り）を以て

「三有を城郭と爲し、高慢を垣牆と爲し

諸趣を却敵と為し、染愛を深塹と為し

愚痴の闇に覆蔽せられ、三毒常に熾んに焼え

悪魔を君王と為し、童蒙依止して住す

貪愛に纏縛せられ、詭曲は正行を壊り

疑惑は慧眼を障へて、諸の邪道に流転す

等……………と

頌して今までに為し來つた生活を懺悔して、更に

「清淨の智慧眼をもて、願くば解説の門を開きたまへ

諸の顛倒を遠離し、無畏にして正道を知り

諸の正趣に了達せり、我に菩提を示現したまへ」と

誠實の心を以て請い奉るのである。文珠師利は之に對して其の菩提心を發して善知識を求めた精神を稱讚し、その精進を持続して菩薩道を求め、普賢行を具うべきことを教えて、第一に和合山に功德比丘を訪問することを勧めるのである。斯くして善財童子の善知識の歴訪が始まるのである。善財童子は在家の青年であつて而かも大菩提心を起すこの童子こそ未來の仏教を代表し、釈迦逝ける婆羅の林より出發して淨土を莊嚴せんとするのである。

善財童子は文珠師利の教誨を聞いて、燃ゆるが如き信念と、堅き決意を以て南行して道を求めるのである。最初の知識は可樂國の和合山中に在住する功德雲比丘である可樂國に向いて和合山に登り、山中に於て十方に周徧

して一心に觀察して大師を求めたのである。斯くの如くすること七日間に及びて山頂に静思して経行している比丘を見て、馳せ參じて教を請うたのである。この状況を

華嚴經卷第四十六入法界品第三十四の三に

「可樂國に向いて和合山に登り、彼山中に於て十方に周遍し、一心に觀察して、大師を求覓すらく何の所に在すと為すやと是の如く尋求すること乃し七日に至る。爾時、善財、彼比丘は乃し山頂に在して静思して経行したまへるを具己りて馳せ詣り、頭面に足を礼し、右邊して住し、大聖に白して言さく、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、而も未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修するやを知らず、我、大師の善能く宣揚したまふを聞けり、唯願くば慈を垂れて、具足し演説したまへ」と。

其の時授けられたのが普門光明觀察正念諸仏三昧であつて略して云えば即ち念仏三昧のことである。其の次の經文に詳細に二十一種の念仏三昧を列挙してゐる。(初めの十は念仏の勝徳圓滿を明し、後の十一種は念仏の妙用自在を顯す) これを探玄記卷第十八^{三五九}に

「普門とは別門を簡異するが故に、謂はく別門の中には或は一方二方、一仏二仏等を見る皆十方と稱せず、今は彼に依らざるが故に普門と云ふ、此門若し開けば普く十方塵数の諸仏を見ること、文に顯るゝ所の如し。等」とあつて即ち此法を成就すれば普く十方諸仏を顯現し、正念に住して所見分明となつて而かも一切の障礙を離るゝことが出来るのである。故にこの名があるのである。これを功德雲比丘が自らその相を説いて

華嚴經卷第四十六入法界品第三十四の三に

「善男子、我解脱の力に於て清淨の方便の慧眼を逮得し、普く照して一切世界を觀察するに、境界無碍（方便に當る）にして、一切障を除く（清淨に當る）等」と。

云つてゐる。先の探玄記に「文に顯るゝ所の如し」とは正しく此を指すのである。この念仏三昧が菩薩の一切修行の根本であることを顯すものである。而るに念仏三昧を明すは此所に初めて出づるのではなくして、華嚴經の一部始終に亘つて広説してある。先づ世間淨眼品一_ナに大衆所得の法門を説いて

「是の如く一切は皆悉く念仏三昧を成就す」と。

次に華嚴經卷第四、盧舍那品第二の三_ナに

「普莊嚴童子は是如来を見已りて、即ち念仏三昧を得たり」と。

又普賢品七_ナに

「念仏三昧は必ず仏を見、命終え後仏前に生じ、彼臨終に見えて念仏を勧む」と

又華嚴經卷第十一十行品第十七の一に

「念仏三昧も乱れず」と又華嚴經卷第二世間淨眼品第一の二帝釈の偈の中に

「若し一切三世の仏を念じ、広く能く仏の境界を觀察せば

諸仏の国土の成敗の事は、
仏の神力を以て皆悉く見ん。

.....

仏の功德の無量なることを念ずるが故に、廣大の歎喜心を生ずることを得」と。

又華嚴經卷第五如來光明覺品第五十文珠師利偈に

「一向に如來を信じ、其心退轉せず

諸仏を念ずることを捨てざれ 是れ彼淨妙の業なり」と。

此、を探玄記二十七に積して信心念仏業と云う。

又華嚴經卷第十三如來昇兜率天宮一切寶殿品第十九四に

「念仏三昧を長養する……………」と。

又同じく十四に

「一切を教化して念仏三昧を修せしめ、法界に充滿して衆王を度脱すること無量無辺なり」と。

又華嚴經卷第十七金剛幢菩薩十迴向品第二十一の四に

「一切の衆生をして、心を莊嚴し、念仏三昧もて普く諸仏を見たてまつらしめ。」と。

又華嚴經第十八の同品第二十一の五に

「一切の衆生をして仏音を聞くことを得しめ、仏音を聞き已りて、自の大憍慢と放逸とを捨離し、諸仏を見たてまつることを得て、堅固に念仏三昧に安住し、仏の境界を修して未だ曾て廢忘せず。」と。

又華嚴經卷第二十の同品第二十一の七に

「三世の一切諸仏を正念して念仏三昧悉く具足するを得。」と。

又華嚴經第三十一仏不思議品第二十八の二_三に

「一切の諸仏は一切世界海の中の種々の衆生海の為に、大善根と念仏三昧とを修し、菩薩の行を行じ、諸仏を觀察して」と。

又華嚴經卷第三十二の仏小相光明功德品第三十_三に

「諸の天子、五欲の纏心は念仏三昧を修して皆悉く除滅せらる」と。

又華嚴經卷第三十六の宝王如来性起品第三十二の四_五に

「若し如来を念ずる者有らば、念仏三昧を得て正念にして乱れざらん」と。

又華嚴經卷第五十の入法界品第三十四の七_一に

「復香有り、清浄莊嚴と名け、善法堂より生ず、若し一丸を焼かば、悉く諸天をして念仏三昧を得しめん」と。

又華嚴經卷六十の同品第三十四の十七_十に

「一切刹の一切衆生は皆悉く念仏三昧を修習せるを見る」と。

斯くの如く華嚴經の始中終に亘つて念仏三昧を説いてゐるが、之等の念仏三昧は観念、称念に通じ又観念中にも理観、事観、事理双修等とあつて、称念にも通の念仏、別の念仏が有る。又別の念仏にも浄土真宗の教義より云う時は真門、要門定散の念仏、弘願の念仏とあつて実に多種多様で誠に複雑である。要するに単に念仏三昧と云う時は單純なる一の行法の如くなれども其の内容の義理に至つては頗る広漠である。大乘小乘に亘り諸宗に通じ、殆んど一代仏教の義理を含むが故に念仏法門は一切を含んで修行の根本と云うことが出来るのである。

功德雲比丘が所得の法界である念仏三昧は自性本覚の解と、聞薰習との外縁に依つて真如法性界の不動を決定し、以て仏を念じ、或は口にこれを称え、身口意の三業相應して無相離念の心境に達する念仏三昧であるから理念の念仏であることは明白である。

扱而善財童子が最初に訪問する善知識功德雲比丘が何故会仏三昧を授くるかと云う理由を大疏鈔(二六)に釈して「最初善友先明念仏法門者以是衆行之先故智論云菩薩以般若波羅密為母般舟三昧為父故依仏方成余勝行故又初住中縁(二七)念仏心樂供養故」と。

即ちこの念仏法門は凡ゆる行の先驅であるから最初にこれを勧むるのである。

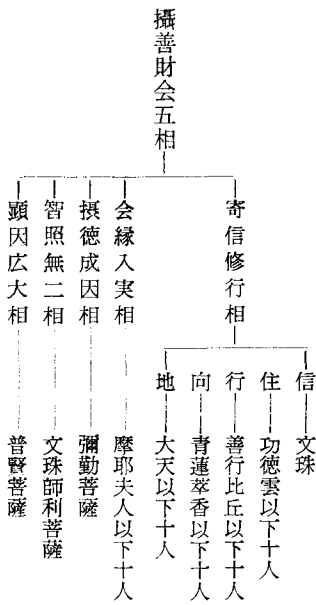
斯くして善財童子は功德雲比丘から念仏三昧を受得して、南へくと諸善知識を歴訪するのである。其の善知識の中には菩薩あり、比丘あり、尼あり、優婆塞(二八)あり、優婆夷(二九)あり、童子あり、童女あり、天あり、天女あり、外道あり、婆羅門あり、長者あり、博士あり、医人あり、船師あり、国王あり、仙人あり、仏母あり、仏妃あり、神等あり其の授くる所の法門も亦種々差別あつて浅薄極まる如きものあり、或は甚深微妙なるものあり、而るに善財童子は不撓不屈の精神を以て道を求めて止まず、何れの場合に際会しても必ず何等かの得る所あつて修養に資し、ますく向上発展し遂に彌勒菩薩の浄土に至るのである。此くに至つて善財童子は昔時文珠師利の許を去つて以来既に一百十一城を経て普門城辺に至つて心竅に文珠師利を思会して慈顔に接せんと願うのである。これを華嚴経卷第六十の入法界品第三十四の十七に

「爾時、善財童子は是の如く百十一の城を經遊して普門城の辺に到り、思惟して住し、十方を觀察して、一心

に専ら文珠師利を求むらく、何んが当に会遇して面り慈顔を奉ずべき、是会を作し、時、文珠師利は遙に右の手を伸べ、百十一由旬を過ぎて普門城に至り、善財の頂を摩でて、是言を作さく、善い哉、善い哉、善男子……皆悉く能はず」と。

「是時文珠師利、善財童子の為に教誨を示し己り、慰諭して、其をして歓喜踊躍せしめ、阿僧祇の法門を成就するを得、無量の明智の光明、無量の菩薩の陀羅尼、無量の大願、無量の三昧、無量の神通、無量の智慧を得、皆悉く成就せしめ、復普賢の所行の道場の内に入るを得しめたまへり」と。

即ち文珠師利は遙かに右手を伸べて百十一由旬を過ぎて善財の頂きを摩でて善哉くと歎じ、進んで普賢道場に入らしめたのである、善財童子は一切衆生の総名代として其の身一生に於て菩薩の信、住、行、向、地、の次第を経て遂に普賢の所に至つて悟りの世界に証入するのである。これを図示すれば左の如し。



又善財童子の歴訪した善知識の名、場所を列挙すれば左の通りである。

「場 所」

「善知識」

「場 所」

「善知識」

一、南方福城莊嚴幢髻羅林

文珠師利菩薩

一六、南方師子重閣

法宝周羅長者

二、南方可樂国和合山

功德雲比丘

一七、南方実利根国普門城

普眼妙光長者

三、南方海門国

海門比丘

一八、南方滿幢城

滿 足 王

四、南方海岸国

善住比丘

一九、南方善光城

大 光 王

五、南方自在国呪栗城

彌伽医師

二〇、南方安住城

不動優婆夷

六、南方住林国

解脱長者

二一、南方不可称国知足城

隨順一切衆生（出家）外道

七、南方莊嚴閻浮提頂国

海幢比丘

二二、南方甘露味国

青蓮萃香長者

八、南方海潮の普莊嚴園林

休捨優婆夷

二三、南方樓閣城

自在海師（海師）

九、南方海潮国

毘目多羅仙人

二四、南方可樂城

無上勝長者

一〇、南方進求国

方便命波羅門

二五、南方難忍国迦陵伽婆提城

師子奮迅比丘尼

一一、南方師子奮迅城

彌多羅尼童子

二六、南方險難国宝莊嚴城

婆須密多女人（優婆夷）

一二、南方救度国

善現比丘

二七、南方首婆波羅城

安住長者

一三、南方輪那国

釈天主童子

二八、南方光明山

觀世音菩薩

一四、南方海住城

自在優婆夷

二九、東方空中

正趣菩薩

一五、南方大興城

甘露頂長者

三〇、南方婆羅波提城

大 天

華嚴經の善財童子

「場 所」

「善知識」

「場 所」

「善知識」

三一、閻浮提内の摩竭提国

安住道場地神

四五、 "

善知衆雲童子

三二、閻浮提の迦毘羅城（黄物城）婆娑婆陀女神

「註」衆雲とは所知所解世間の持芸則ち文字等である。

三三、 " 摩竭提国 甚深妙徳難垢光明夜神

善知とは能知の善である。

三四、 " 喜目觀察衆生夜神

四六、摩竭提国婆咀那城

賢勝優婆夷

三五、 " 妙徳救護衆生夜神

四七、南方沃田城

堅固解脫長者

三六、 " 寂靜音夜神

四八、 "

妙月長者

三七、 " 妙徳守護諸城夜神

四九、南方出生城

無勝軍長者

三八、 " 開敷樹萃夜神

五〇、南方法聚落

尸毘最勝婆羅門

三九、 " 願勇光明守護衆生夜神

五一、南方妙意萃門城

徳生童子

四〇、閻浮提の流彌尼園林

妙徳円満神

五二、 "

有徳童子

四一、摩竭提国迦毘羅城

瞿夷女（仏妃）

五三、南方海澗国大莊嚴園林

彌勤菩薩

四二、 " 摩耶夫人（仏母）

五四、普門城

文殊師利菩薩

四三、 " 天主光童子

五五、金剛藏道場（蓮萃藏師子座）普賢菩薩

四四、摩竭提国迦毘羅城

遍友童子（博士）

以上五十五の善知識を類別すると二十有つて一には菩薩は觀世音、正趣、彌勒、文珠、普賢の五菩薩あり、二には比丘は徳雲、海雲、善住、海幢、善見の五比丘あり、三には比丘尼は獅子奮迅比丘尼一人あり、四には優婆

塞は明智居士一人あり、五に優婆夷には休捨、具足、不動、婆須密、賢勝の五人あり、六に童子には自在主、善知衆芸、徳生の三人あり、七に童女には慈行、有徳の二人あり、八に天には大天の一あり、九に天女には天主光の一あり、十は外道には遍行の一あり、十一に婆羅門には方便命、尸毘最勝の二人あり、十二は長者には解脱、甘露頂、法宝周羅、普眼妙光、青蓮萃香、無上勝、安住、堅固解説、妙月、無勝軍の十人あり、十三は博士には遍友の一人あり、十四は医師には彌伽の一人あり、十五には船師に一人の自在海師あり、十六に国王には満足、大光の二人あり、十七に仙人には毘目多羅の一人あり、十八に仏母に一人の摩耶夫人あり、十九に仏妃には一人の瞿夷女あり、二十に諸神には安住地神、婆娑婆陀女神、甚深妙徳雑垢光明夜神、喜目観察衆生夜神、妙徳救護衆生夜神、寂靜音夜神、妙徳守護諸城夜神、開敷樹華夜神、願勇光明守護衆生夜神、妙徳円満神の十神あり、前後通じて五十五の善知識であるけれども両度の文珠師利を合して一とし、五十四の善知識を類別すると即ち斯くの如く二十類あるのであるが而し又五十四の善知識中、徳生童子と有徳童女とは同一に問答するが故に一の善知識として、称して五十三の善知識と云うのである。

菩薩	5
比丘	5
比丘尼	1
優婆塞	1
優婆夷	5
童子	3
童女	2
天	1
天女	1
外道	1
婆羅門	2
長者	10
博士	1
医師	1
船師	1
国王	2
仙人	1
仏母	1
仏妃	1
諸神	10

善知識

之等の善知識を歴訪して善財童子はその菩薩行と云う問題について領解を深めつゝ行くのである、その教説こそ華嚴經の三分の一を占むるものであつて、雄大な構想の中に如何に菩薩道の普遍なるかを、現はさんとするかは之等の善知識の身分、名、場所等を見ても察知することが出来るのである。例えば三番目の海門比丘が海を凝視すること十二年、十番目の方便命婆羅門が刀山より火聚に身を投じ、十八番目の満足王が嚴刑により、二十二番目の青蓮華香長者が香を焼きて仏道を會得すること、二十六番目の婆須密多女人が感覺的な快樂から法界へと帰入すること等も誠に面白いことである。又四十一番目の釈尊の妃瞿夷、四十二番目の摩耶夫人等も現はれ来ることは何を意味するものであるか、善財童子は如何なる知識に対しても謙虚な態度と燃ゆるが如き信念を以て心底から其の教誨を請い奉つたのである。真理を把握せんとする心の床しき、これこそ眞實の道を求める者の態度でなければならぬ。この眞實の精神があつてこそ道は得られるものである。

この五十三の善知識を統収すれば文珠師利、普賢の二菩薩に歸するのである。即ち初めの文珠師利より後の文珠師利に至る間、中に徳雲比丘等の余他の善知識は皆是れ文珠攝化の徳であつて、文珠の智慧の大海より出生する所であるから総じてこれ文珠師利の位であつて般若（智慧）門に属するのである。後の普賢は法界門に属するのであつて、般若（智慧）に依らなければ法界に入ることが出来ない故に善財童子は始めて文珠師利に遇い、又法界に入ることがなければ般若を顯すことが無き故に善財童子は遂に普賢に歸するのである。即ち善財童子は始め文珠師利に遇うて後に普賢に歸して法界に証入するのである。

果して而らば文珠師利は何故に善財童子に対して一切の法を宣説せずして五十五の善知識を求めしめたかと云

うと其の意は非常に多いのである。賢首大師は探玄記第十八五十六に四門分別を以て具さに其の義を明してゐる。即ち

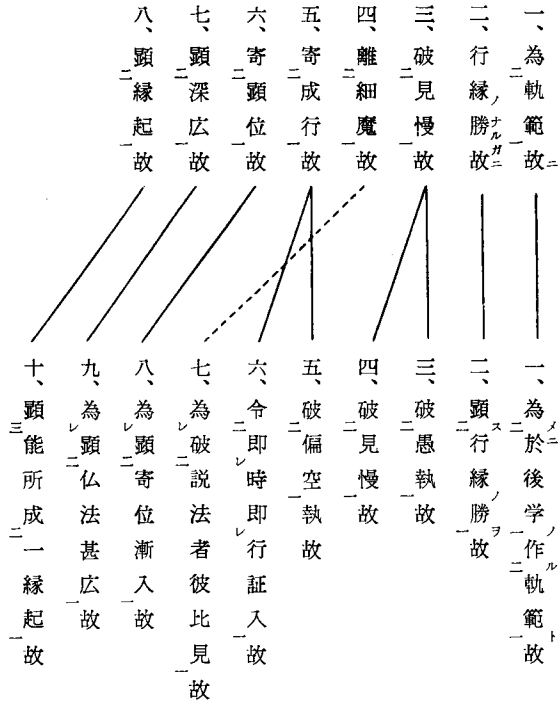
「今通じて下の文の諸の善知識を弁ずるに、略して四門を作る。一に善友を求むるの意を明し、二に善知識の義を顕し、三に文段を料簡し、四に本文を消釈す。初の中に何が故に文殊、即ち其一切の為に宣説せずして、善財をして広く多処を歴て、善友を求めしむとならば、釈して云はく、意は乃ち多端なり、略して論ずるに八種あり。一には軌範と為すが故に。謂はく諸の菩薩は仏の聖法に恒に二行を修す、聞はく、法を求め、法を説く經に云はく諸の菩薩は法を求めて懈らず、法を説いて憍むこと無きことを明す、此中に斯二行を顕して諸の衆生に示す、是故に善財は求法の妙軌を成じ、善友は説法の良規を顕し、諸の衆生をして此躡を軌として行を成ぜしむ。則ち仏華は常に敷け、広嚴恒に著るゝ者なり。二に行縁勝るるが故に、謂はく、成行の要は良友を以て先と為さざること莫し………是故に善財は之を求めて足ること無し。三に見慢を破するが故に。善財等の新学の菩薩をして自らの憍慢と及び執見とを破せしむるが故に、其をして法を求めしむるに、男女、長幼、貴賤、道俗、尊卑、神天、外道を簡はず。………四には細魔を離るるが故に。若し人を封じて一を守らば、直に後行増さざるのみに非ず、亦乃し執著の失を成ずるが故に。………五に成行に寄するが故に。問ふ此善財一法門を得れば修行を成ずるに足れり。何んが修習することを為し、乃し遊歴して厭くこと無きや、答ふ即ち此れ広く求むるは菩薩の事、善友の行、及び求法の行を成就す。縦ひ法を得ざれども此れ已に行を成ず、況んや皆彼未曾得の法を得て、慧眼開明し眞法界を見るをや。………六に位を寄顯するが故に。謂はく、広く

善友に寄せて信等の五位の差別の相を顕す、文処見つべし。……七に深広なることを顕すが故に。謂はく、
仏法の広くして無辺なることを表顯するが故に。諸の知識は位法雲を極むること有り、雖猶我唯此一法門を知
れりと称す。豈能く諸の大菩薩の無量の行相を了知せんや。仏法の深くして底無きを表顯するが故に、善財統
ひ位は登地に至るとも猶而も我未だ知らず、云何が菩薩の行、菩薩の道等と云ふがごとし、況んや今具縛少善
の凡夫、微しく所解有れば便ち自ら一切の仏法を解りと謂いて慢を起し自ら高ぶり他人を陵蔑するをや、知
ずして便ち經論を臆断して自ら陥り、人を陥るること有らば、何んぞ悲しみの甚しき。八に縁起を顕すが故に。
是故に善友の外の善財無きが故に、一即一切を彰し、善財は諸位を歴ることを明す。善財の外の善友無きが故
に一切即一を顯し、多位の感ずること、善財に在ることを明すなり。是に由りて卷舒自在、相融無碍なること
之を思うて知んぬべし。」と。

多端の意を略して八種にして論究してゐる、又華嚴大疏鈔六十二八十四にこの八種を開いて十義としてゐるのである。今この二疏の対配を示せば三十九頁の通りである。

但し探玄記の第四離細魔故と華嚴大疏の第七為破說法者彼此見故とは稍、趣意を異にしてゐる。即ち探玄記の方
は唯一人の善知識につく求道者の執心を破して居るの二に對して華嚴大疏の方は善知識が求道者に對して彼は我が徒
とか、此は我が徒に非ずとか云う彼此の見解を破せんが為に多くの処を経歴して多くの善知識を求めしめて
ゐるのである。探玄記は求道者に就き華嚴大疏は說法者についての相異があるのである。

文殊師利は善財童子に對し直ちに眞實の法を宣說せずして善友を求めしめたのは法の尊嚴性を知らしめ、善友



は説法の良規であることを顯はさんが為である。而して善友は大因縁であり、奇特の法であつて道を求める為には善友の重大性を知らしめんが為である。又自らの我見、我慢を破らんが為に凡ゆる階級の人々に面接させて、其の人々に対して身を低く謙虚に眞実を求めることを教え、而して説法者の彼此の見解を破せんが為であつたのである。即ち他を封して一を守る執着を破らんが為である。又数多くの善友を歴訪させて法の深広にして無辺な

ることを知らせんが為であつたのである。

次に何故、文珠師利が善財童子に南方の善知識を教えたかと云うに、地前の知識は多く南方に居るのであつて南方について古来から四義がある。一には正の義であつて向う所邪に非るを表はすのである。二には背闇向明の義であつて南方は明らかにして、暗に背き障壁を捨て、理に向うことを表はすのである。三には離増減の義であつて日の東より出で、西に没するが如きは是れ増減の相なきことを表はす。即ち東西の二辺を離るゝ中道法界を表はす、四には是れ生の義であつて南方は陽を主として万物を發生さすことで善財童子の因行が漸次に増長することを表はすのである。以上四義の中前の二と後の一とは地前の南方これを表はし、第三の中の義は地後これを表はす、後に文珠師利の無方は般若無相の故に、普賢菩薩の無方は法界円徳普遍なるが故である。これを華嚴經探玄記^{三十七}に

「初に地前の知識多くは南方に在り、地内に方無く、地の後亦南方の者有り。其南といふに四義有り、一には是れ正の義なり、指南の説等の如し、向う所の邪に非ざることを表すが故に。二には是れ背闇向明の義なり、障を捨て、理に向ふが故に。三には是れ離増減の義なり、日の東に出でて西に没するが如きは、是れ増減の相なり、南は二辺を離れ中道法界を表す。四には是れ生の義なり、謂はく南は其陽を主とす。是れ其生の義なり、北は陰を主とす、是れ滅の義なり。此れ善財の因行の漸く増するを表すが故に、生の義を顕す。如来涅槃の全棺の北首なるは其滅の義を表す。此四の中に於て、前の二と後の一とは地前に之を表し、其離増減の義は地後に之を表はす、地の中は正証離相の故に南をもて表すべからず、地後は業用を顕し、地内に同じからず。後の文珠に示有り

て方無きは般若に加行有るも証は無二なることを表すなり。末後の普賢は示無く方無きは、法界の徳円にして普遍なるを表すが故なり。」と。

三

次に善知識に就いて論究しようと思ふ、善知識とは如何なる意義があるかと云うに孔目鈔四二五に

「在物先知亦為衆情所識故名知識。」と。

即ち世間に在つて先ず能く物を了知し、知識ある人を云うのであつて、亦衆人の為に能く知らるゝ人を善知識と云うのである。又華嚴大疏鈔六十二二十七に

「言善知識者謂令於未知善令知、未識惡法令識、或二字普通識約明解。知約決了云々」と。

即ちこれは知識の二字を善惡の二に分けて未知の善と未知の惡とに於て能く之を人に知らしめて人を指導する者を善知識と云うのであつて、即ち他の者を化導する方面に就いての義である、前の孔目章は自利の徳を他の為に知識せらるゝ名声高き人物を善知識と名くる意である。所謂淨土三部經の中の阿彌陀經に「大阿羅漢衆所知識」とある意である。而し孔目章と華嚴大疏鈔とは別の意ではなく畢竟自行の徳について云えば孔目章の如く、他を化益する徳について云えば華嚴大疏鈔の如くであるから長く相違するのではないのである。而るに探玄記卷第十八五十四に

「第二に知識の義を積せば二有り、先には通、後には別なり。通じて真の善知識を論ずに其三類有り。一に人、

二に法、三に人法合して弁ず。一に人有り能く其現苦を濟ふと雖も、而も修善を勧めざれば眞の善友に非ず。二に世善を修することを勧めて惡趣を免ると雖も、而も出世の路に修向することを勧めざれば亦眞友に非ず。三に二乗の出世の善行を修して、三界の苦を免ると雖も、而も菩薩の道を行ずることを勧めざれば亦眞友に非ず。四に菩薩の道を修することを勧めて、二乗を免ると雖も、猶相善を存すれば亦眞友に非ず。五に要ず衆生を勧めて無相の行を修する、方に眞の善知識と爲す、此は仏藏經及び智論等に依りて弁ず。六に要ず勧めて普賢の行徳を具せしむるを方に究意の眞の善知識と名く。此上は竝に是れ行の善知識なり、行を以て様を引くが故に唯人に属す。二には法の善知識に亦六重有り……………三に人法合して弁ずる中に亦六重有り……………之に準じて解しつべし。」と。

即ち人と法と、人法合弁の三について詳しく述べて居る。これが此入法界品の初めの入法界を類別すると人法界、法々界、人法俱融等として示し又探玄記卷第十八四丁に

「一に法々界、二に人法界、三に人法俱融法界、四に人法俱泯法界、五に無障礙法界なり。初めの中に十有り。一には事法界なり。……………此十法界同一縁起無碍隣融して、一に一切を具すること、之を思つて見つべし。二に人法界とは、此下の文に準ずるに亦十門有り謂はく、人天、男女、在家、出家、外道、諸神、菩薩及び仏なり。此れ竝に縁起相分れて、参へて雑らず、善財具已りて即ち法界に入るが故に、人法界と名くるなり。三に人法俱融法界とは、謂はく、前の十人十法は同一縁起にして、義に随ひて相分るるも融攝無二なること、之を思つて見つべし。云々」と。

ある如く唯人のみにつかずして人と法と人法合弁との三義を以てしてゐる。即ちこれ自ら一品の前後の文を貫く所明である。

其の人の中六種の知識に分類して第一と第二は人天の知識であつて未だ出世間を教示することが出来ないから眞の知識ではないのである。その中第一は人天の現在の苦果を救う知識であり、第二は人天の善果の因を教える知識である。第三は出世の善知識であるけれども二乗（声聞、縁覚）の善に止まつて未だ大乘菩薩の善法を教えないから亦眞の知識ではないのである。故に之等は二乗の知識であると云はなければならぬ。第四は地前の行を教うる菩薩の知識であり、第五は地上の道を教うる知識であつて無相の深理を説く人故に一般大乘より云えば眞の知識であるけれども、而し一乗の普賢行より云えば尚眞の知識ではないのである。故に第六の普賢行を教えて人をして普賢の徳を具せしむるを以て究竟として眞の善知識となすのが探玄記の釈意である。

善財童子は苦心を重ねて南へ／＼と各善知識を尋ねて最後に会う善知識は普賢菩薩であつて普賢菩薩は善財童子に教えて曰く、四十華嚴卷第四十^十に

「若し速かに此十大願を成就せんとすれば阿彌陀仏國に往生すれば一切円満して尽く余あること無く一切衆生界を利樂す。」と。

即ち普賢菩薩の教示する所は西方彌陀の浄土に往生することにあるのであつて、之を更に四十華嚴の終、普賢の偈には

「願我臨欲命終時 尽除一切諸障礙

面見彼仏阿彌陀 即得往生安樂刹。」と。

実に華嚴の法界法門は普賢の行である。普賢の行とは一行一切行を云うのであるが、換言せば即ち彌陀の本願によつて往生浄土の果を得るを云うのである。彌陀の本願名号の一法中に攝諸善本具諸徳本であつて、万善万行恒沙功德の一切を具備してゐるのである。故に浄土宗の開祖法然上人は其の著撰集には名号を「万徳の所帰なり」と云つてゐる、この名号を信知する一念に無上大利の功德を具して一毫末断惑の凡夫、速疾に往生即成仏の大益を得るのである。即ち名号は普賢の行でなければならぬ。この本願名号の一法を教示する法然上人を親鸞聖人は眞の知識として称讃してゐるのである。念仏の行人は浄土に往生して後、再び生死の迷界に還りて有縁の衆生を濟度する還相廻向の大妙用を普賢行と名くるのである。何故ならば自由自在に一切衆生を化益することが出来るからである。之を親鸞聖人は浄土和讃第十六首に

「安樂無量ノ大菩薩 一生補処ニイタルナリ

普賢ノ徳ニ帰シテコソ 穢国ニカナラズ化スルナレ」と。

彌陀の浄土に往生したるものは皆悉く普賢の徳を具して普賢の行を行するのである。親鸞は彌陀の本願を称して門余の大道と云い、賢首大師は華嚴の普賢法を別教一乗と云つてゐる。華嚴と眞宗とは聖道、浄土、自力、他力、の相違ありと雖其の詮す所の法門は共に普賢行であつて、二者通融する所があるのである。故に善財童子が善知識を訪ねて法を求むる相状と念仏行者が明師を訪ねて道を求むる相状とは變りがないのであつて所謂偽の知識、仮の知識を捨て、眞の善知識を訪ねて眞の出離成仏の法を求むるに在るのである。

今これを親鸞聖人に就いて論究すれば歎異鈔第二章に

「親鸞におきてはたゞ念仏して彌陀にたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせをかうふりて、信ずるほかに別の子細なきなり。」と。

親鸞のこのよきひとは総じて云えば三国七高祖、即ち印度の龍樹菩薩、天親菩薩、支那の曇鸞大師、道綽禪師、善導大師、日本の源信僧都、法然上人の七人であるけれども、別して云えば法然上人のことであつて、法然上人以前に遇はれた者は皆眞の知識ではなくて、即ち探玄記の人の六種の中の前五人に当り、又法然上人に遇はれたのが探玄記の第六眞の知識に当るのである。この法然上人を親鸞は全幅の信賴を以て随順されたのである。即ち歎異鈔第二章に

「たとひ法然上人に、すかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらう。」と。

親鸞は学徳兼備の法然上人を崇敬されたのではなくて、十惡愚痴の法然の法然にかえつて彌陀の本願を信じ、正法を伝布する上人をよき人として絶体に信賴されたのである。よき人を持つことこそ、よき人に遇うことこそ、人生に於ける最も重要なことではなければならない。而るによき人に遇うことは難中の難であることを痛切に体験された親鸞聖人であつたのである。故に親鸞の著の大經和讚（第十九首）に

「善知識ニアフコトモ オシフルコトモマタカタシ

ヨクキクコトモカタケレバ 信ズルコトモナヲカタシ」と。

又高僧和讚源空章（第十二首）に

「真ノ知識ニアフコトハ　カタキガナカニナヲカタシ」と。

更に親鸞の著、教行信証の総序一五左に

「爰に愚禿釈の親鸞慶ばしき哉や、西蕃月氏の聖典、東夏日域の師釈に、遇ひ難くして今遇ふことを得たり、聞き難くして已に聞くことを得たり。真宗の教、行、証を敬信して、殊に如来の恩徳の深きことを知んぬ、斯を以て聞く所を慶び獲る所を嘆ずるなり。」と。

万劫億劫にも遇い難き「よき人」に遇はれた親鸞は一切の理屈を超えて全生命を投じて信順されたのである。即ち「よきひとのおほせ」に永遠の真実を仰ぎ、法然上人の仰せに直ちに本仏の本誓を聞きて如来の攝受に直參せられたのである。即ちよき人の仰せに真実を確認せられたのである。

今華嚴經に於て文珠師利は善財童子に教うるに善知識に親近して菩薩の行を問ひ菩薩道を修習せよと。之を華嚴經卷第四十六の初めに

「爾時、文珠師利、象王の廻るが如く、善財童子を親じて、是の如きの言を作さく、善い哉善い哉、善男子。

乃ち能く阿耨多羅三藐三菩提心を発し、善知識を求め、善知識に親近し、菩薩行を問ひ、菩薩の道を求めんとせり。善男子、是を菩薩第一の蔵にして一切の智を具すと為す。謂ゆる善知識を求めて親近し恭敬して之を供養するなり。是故に善男子、応に善知識を求めて親近し恭敬し、一心に供養して厭足無く、菩薩行を問うべし、云何が菩薩道を修習し、云何が菩薩行を満足し、云何が菩薩行を清浄にし、云何が菩薩行を究竟し、云何が菩薩行を出生し、云何が菩薩道を正念し、云何が菩薩の境界道を縁じ、云何が菩薩の道を増広し、云何が菩薩の

普賢行を具するや。」と。

善財童子これを聞いて教の如く善知識に皆同じく之を問うのである。即ち文珠師利が華嚴の法門を善財童子に授け、善財童子これを聞いて十信の位を得、更に南方に知識を求めて徳雲比丘等の四十人によつて三賢十地の四十位の法門を授けられ、摩耶夫人以下の十一人によつて等覺の法門を受けて最後に普賢菩薩に遇うて果海に証入するのである。

四

最後に究竟の法門、普賢行を考察して筆を洗いたいと思う。凡ゆる經典は菩薩道を説くのが通説ではあるが華嚴經に於ては如何に菩薩道を見るかにあるのである。即ち如何なる意味のものとして菩薩道を説くかにある本經の普賢菩薩行品に宝王如来性起品とに菩薩道の意義を顕現してゐる。この如来性起品は唐訳に於ては如来出現品となつてゐる。故に普賢行に於て如来の出現を感ずること、これ即ち華嚴經の菩薩道の意義でなければならない。普賢とは賢首大師は探玄記卷第十六に

「二に品名とは、徳は法界に周ねきを普と曰ひ、用は善に順成するを賢と称し………」と。

又華嚴經大疏卷五（疏鈔卷一の下）には

「普賢と言ふは体性周遍するを普と曰ひ、縁に随ひ徳を成ずるを賢と曰ふ、此は自体に約す、又曲に濟うて遺すなきを普と曰ひ、極に隣り、聖に亜ぐを賢と曰ふ、此は諸位の普賢に約す、又徳性界に周きを普と曰ひ、至

順にして善を調ふるを賢と曰ふ、此は当位の普賢に約す、又果にして窮めざるなきを普と曰ひ、因門を捨てざるを賢と曰ふ、此は仏後の普賢に約す、位中の普賢は悲智隻運し、仏後の普賢は智海已に満ず、智に即すの悲を運らし、寂にして常用、未來際を窮む、又一即一切を普と曰ひ一切即一を賢と曰ふ、此は融攝に約す」と。而して更に賢首大師は普賢の行として探玄記卷第十六に

「一は時劫に達し、二は世界を知り、三は根器を識り、四は因果を了し、五は理性を洞かにし、六は事相を鑒み、七は常に定に在り、八は恒に悲を起し、九は神通を現じ、十は常に寂滅なり。」と。

十種を挙げてゐる。これ即ちその智慧の識らざるものなく、その慈悲の至らざる所なく、常に寂靜に住しつゝ、衆生に応用するものである。

普賢とは総べてに善きものであつて、それは善を念じて著す所なく、法に随つて滯ることなきものである。一切の仏を供養し、一切の衆生を救済しようと云う行願あるものは普賢たらんことを念せずしてそれが成就する筈はないのである。故に普賢の行はものに逆うなき心を基本とするものである、自己と見解を異にする人に対して逆う心があれば普賢の行は成就しないのであつて、それは「普」賢ではなくて「特」賢となるからである。又自己が行はんとする善事に対して批議批判するものを見て逆う心があれば普賢の行は成就しない。それは「普」賢ではなくて「我」賢となるからである。

故に華嚴經卷第三十三の普賢菩薩行品第三十一の初に先づ瞋心の実を説いて

「仏子、若し菩薩摩訶薩、一の瞋恚の心を起さば、一切の悪の中にて此悪に過ぐるもの無けん」と。

瞋心は即ち逆う心であつて、逆う心は即ち普賢を失う心である、凡ゆる仏道はこれによつて障害せらるゝのである。故に本経卷第三十三の普賢菩薩行品が第三十一の初めに、瞋心によつて生ずる障害の百種を説いている。即ち

「仏子、菩薩摩訶薩、瞋恚の心を起さば、則ち百千の障碍の法門を受けん。何等をか百千と為す。謂ゆる菩提を見ざる障、正法を聞かざる障、不浄の国に生るゝ障、悪道に生るゝ障……三世の諸仏菩薩に順せざる障を受けん。等」と。

実に瞋りこそは自他の生命を害するものである。而らば斯ゝる瞋心のなき普賢の行とは如何なるものであるかと云えば先づ十種の正法を修習すべきことを次に説いてゐる。即ち

「仏子、是故に菩薩摩訶薩は速かに菩薩の行を具足せんと欲せば、应当に十種の正法を修すべし。何等をか十と為す。謂ゆる一切の衆生を捨てず、諸の菩薩に於て如来の想を生じ、常に一切の仏法を誹謗せず等」と。

又次に説いてこの十種の正法に安住すれば能く十種清浄の法を攝取することが出来る。即ち

「仏子、菩薩摩訶薩は是の如き十種の正法に安住すれば、則ち能く十種の清浄法を撰取す、何等をか十と為す。謂ゆる甚深の法に於て究竟すること清浄、善知識に親近すること清浄、能く諸仏の正法を護ること清浄等」である、

更に説いてこの清浄の法に安住してよく十種の正智を具足することが出来る。

即ちそれは

「仏子、菩薩摩訶薩は是の如き清淨の正法に安住すれば、則ち能く十種の正智を具足す。何等をか十と爲す。謂ゆる衆生の心行を分別する智、衆生の諸の業報を分別する智、普ねく一切諸仏の法を照す智、等」である。更に説いてこの十種の正智に安住すれば十種の巧随順入に入ることが出来る。

即ちそれは

「仏子、菩薩摩訶薩は是の如き十種の正智に安住すれば、則ち能く十種の巧随順入に入る何等をか十と爲す。謂ゆる一切の世界は一毛道に入り、一毛道は不可思議の刹を出す。一切衆生の身は悉く一身に入り、一身に於て無量諸身を出す。不可説の劫は悉く一念に入り、一念をして不可説劫に入らしむ、一切の仏法は悉く一法に入り、一法をして一切の仏法に入らしむ等」である。

更に又次に説いてこの十種入法を分別すればよく十種の直心を安住することゝなる。

即ちそれは

「仏子、菩薩摩訶薩は是の如き十種の入法を分別すれば、則ち能く十種の直心に安住す。何等をか十と爲す。

謂ゆる一切世界の語言、非語言の法の直心に安住し、正念一切衆生の直心に安住し、等」である。

更に説いてこの十種の直心に安住すれば、即ち諸仏の十種の巧方便法を得るであらう。

即ちそれは

「仏子、菩薩摩訶薩は是の如き十種の直心に安住すれば、則ち諸仏の十種の巧方便法を得、何等をか十と爲す。謂ゆる巧方便を得て普く諸仏の深法を照し、巧方便を得て諸仏の深甚の勝法を出生し、等」である。

總べて之等の經文は悉く普賢行の如何なるものであるかを詮すに外ならないのであつてそれ等は總べて瞋らずして容るゝ所に詮はるゝものである。故に之等を結んで

「仏子、是故に菩薩摩訶薩は應當に一心に恭敬して是法を聴受すべし。何を以ての故に。菩薩摩訶薩、是法を聞くことを得ば少方便を以て疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得、三世諸仏と等しからん。」と。

この經文の中の少方便とは結局は瞋らずして容るゝことであつて即ち普賢行とは大悲行であることを詮はさんが為である。而らば何故に大悲は普賢と云はるゝかと云えば大悲は普ねく一切衆生を攝化して仏道を成せしめんとするものであるからである。大悲は徒らに衆生を妄愛するものではなくて衆生の生活に同感しつゝ共に仏道を成せんとするものである。大悲に斯くの如き内面的理想がなければそれは普賢ではなくして普愚である故に大悲は普賢であると云うことによつてそれ自身の本性も明らかにせらるゝことである。即ち經説には如何に一切と云うことが強調されてゐるかゞ解る如く一切は「普」を顯現するものに外ならないのである。華嚴經が普賢を開顯するものであることは經の至る所に菩薩の徳を讚嘆すると同時に必ず普賢の徳を具うと云い、又三十四品の重要な所は多く普賢に依つて説かれて居ることに於て知らるゝのである。

文珠は智慧を主とし普賢は大悲を本とするのであつて華嚴經に於ては文珠は普賢と並んで重要な位置にあるのである。又善財童子の第一の善知識も文珠である、始めは終りに徹し終りは始めを成ずるものであるとせば普賢行は文珠智の徹底であつて文珠智の根底にあるものと云はなければならぬ。善財童子は文珠師利の指示に隨ひ悠悠善知識を五十余城に求め一法門を聞いて更に一法門を求め、一法門を証つて更に又一法門を知らんとするの

である。又五十三の善知識なるものは如何に在家や女性の多いかを見れば普賢行は地上の教えを意味することが解るのである。この意味に於て華嚴經こそは真に仏教による人生を説くものと云はなければならぬ。

要するに華嚴經を代表する人格は普賢菩薩であつて、この普賢菩薩の行じた所を実証したものは善財童子である。而してこの善財童子の歩んだ道はそのまゝ華嚴經を尽してゐるのであり、普賢の行願である。善財の求道の一二が普賢行の一二であり、その一行が一行即一切行、一切行即一行であつて法界を徹つてゐたのである。

〔註〕(1) 文珠師利とは大乘の菩薩であつて普賢菩薩と共に釈尊の挾侍であるこの菩薩は一切衆生に榮を与う。

(2) 波羅門とは古代印度に於ける四姓の一であつて自ら梵天の後裔であると稱し四姓中の最高位に居る、祭祀を執行する故に宗教上に於ける権能は全くこの種族の手にあつたのである。

(3) 探玄記とは華嚴經探玄記のことであつて唐の賢首大師法蔵の撰である六十六華嚴を随文解釈し華嚴宗の要義を述べている。

(4) 大疏鈔とは詳しくは大方広仏華嚴經隨疏演義鈔と云うが略して華嚴大疏鈔と云う、新訳華嚴を訳せるものであつて唐の澄観の撰である。

(5) 優婆塞とは在家の信者のことを云うのであつて諸の善法に親近し、修事し、又諸の善士に親近承事し、三宝に近く住宿し、三帰を受けて五戒に住す。

(6) 優婆夷とは在家の信女のことを云うのであつて諸の善法に親近し、修事し、比丘尼に親近し、承事して三帰を受け、五戒に住す。

(7) 孔目章とは唐の智儼の撰であつて詳しくは華嚴経内章門等雜孔目と云い、或は単に孔目章と称す六十華嚴の七廻八会に就き百四十余个の別章を列ね、本経一孔一目の小乘、三乘、一乘の差別を詳かにし、華嚴大經の詮顯する無尽縁起の法門を明している。

(8) 三賢とは賢位の三種であつて賢は賢善調和の義である、善根を修して煩惱を制伏して心調和なる位を云うのである、大乘にては十住、十行、十廻向の三を云うのである。

因みに禪寺の山門閣上観音菩薩の左辺に善財童子の像を安置してゐる、これは善財童子が五十三の知識を歴訪して第二十七番目に於て観音大士に遇いて法を聞きし因縁を取つて菩薩の脇士と為せしものである。

参考文献

華嚴經
探玄記
孔目章
大疏章
歎異鈔
浄土、高僧和詠

脇谷氏「華嚴經要義」

華嚴經の善財童子

華嚴經の善財童子

金子氏「華嚴經概説」

河野氏「華嚴經講義」

亀川氏「華嚴学」

湯次氏「華嚴大系」

拙著「華嚴哲学の研究」

拙著「歎異鈔の信仰」

海音寺著「人生遍路」

龍大編「仏教大辞彙」